

京都大学教授に就任して

ごあいさつ

教授 日野正訓
(平成5年学部卒業)

昨年4月に京大数学教室に着任した日野です。新任教員として何か寄稿してほしいと依頼されたため、学生時代のことを思い出しながら自己紹介も兼ねて文を綴ってみます。

京大数学教室には学生として学部から博士後期課程までの9年間、および数学教室の助手として2ヶ月間お世話になり、京大情報学研究科に移籍後は理学部兼担として15年間間接的に関わりがありました。その後大阪大学基礎工学研究科に3年間在籍したのち、京都大学に戻ってきたこととなります。専門分野は確率論で、学生時代は渡辺信三先生と重川一郎先生に主に指導を受けました。もともとは無限次元空間上の確率解析を研究テーマにしていたのですが、情報学研究科時代にフラクタル上の解析にも取り組み出し、大阪大学時代にはランダムグラフといったいわゆる離散確率論の分野にも手を伸ばし始め、現在に至っています。

私が大学生・大学院生だった頃というのは平成一桁の年代で、大昔というほどではありませんが、教室にはまだガスストーブが設置されており、数学図書室は3階にあって、中庭にはプレハブ院生室が建っていた時期です。コンピュータやインターネットの環境が整備されはじめ、勉学・研究のための情報収集方法ががらりと変わる過渡期でした。文献を探すためにMathematical Reviewsの分厚い冊子体を1ページずつ捲っていたのが、データの入った数枚組のCDROMを図書室で借りてパソコン上で検索できるようになったことに喜び、そのうちインターネット上で自在に検索が行えるようになり、という変遷を大学院生時に経験したのは幸運でした。当時は良い計算機環境が大学以外に身近になく、電子メールの送受信や論文執筆のために、学生も利用できる計算機室によく出入りしていたものです。慣れとは怖いもので、現在当たり前のように感じている環境は少し前まで全く存在しなかったことをつい忘れそうになります。

学部生の頃は、将来のことをあまり考えずにとりあえず数学に取り組んでみるかという姿勢でした。抽象的な数学の概念について深い理解になかなか至らないまま勉強していたことも多かったように思います。学生有志が作成した授業紹介冊子に寄せられたどなたかの先生の文章で、抽象概念をすんなり理解する人もいれば時間がかかる人もいる、人それぞれなのだからすぐ理解できなくても落胆せずに気長にやっていたら分かる時が来るさという主旨の一文があり、慰められたことを覚えています。学部時代の自主ゼミではいろいろな先生方や先輩方・同期にお世話になり、今から思えば大変恵まれた環境でした。学部3、4回生の頃は、バブル経済が崩壊したとはいえ企業からの案内パンフレットが段ボール箱

にぎっしりと詰められて自宅に送られてくるような、まだ威勢のよい時期です。学部卒で就職するか、大学院に進むかで幾分迷いました。修士課程修了後は企業等への就職や内部進学、他大学の博士後期課程に進むなどいろいろ選択肢があるのだよという助言を専門分野の違う方からいただき、もう少しモラトリアムして先に進んでみても何とかなるかという判断をしたのが人生の一つの分岐点でした。今振り返ってみると結果オーライの側面が大きいのですが、それなりに自分の中での紆余曲折と巡り合わせがあり、縁遠かったアカデミックの世界に至ったこととなります。

時は流れ、現在大学教員として教育・研究・運営に携わっていると、学生時とは違った視点から見えてくるものもあります。また、近年は学生へのサポートも手厚くなり、レポート課題や中間試験、質問受付等のアフターケアなど、教員側も随分と労力をかけるようになりました。Pay it forward の精神で、時間をかけて授業等の資料を作ったりするものの、効果が目に見えては現れないなと思うこともあります。教育というのは本来そういうもので長期的な観点で考えるべきものなのでしょう。いま学生の方が数年後か数十年後に社会の主要な地位についたとき、数学教育や数学研究に対して適切で好意的な見解を持ってもらえば有り難いという気持ちでおります。